

# 南平岸なるほどばなし

## 高級品だった「平岸リンゴ」



明治4年(1871年)に岩手県の水沢から移住してきた人々は、ふるさどで栽培していた麻を平岸でも育てようと試みましたが、土地の状態が麻畑には向かず、明治8年(1875年)に、開拓使の顧問だったアメリカ人・ケブロンケブロンの「リンゴは寒い土地でもよく育つ」という言葉を受けて、開拓使を通じてリンゴの苗木が道内各地に配布されたことから、平岸でのリンゴ栽培がはじまりました。



昭和35年(1960年)頃りんごの収穫

明治17年(1884年)頃からは平岸地区全体にリンゴ園が次々に誕生しました。当時のリンゴは「平岸リンゴ」と呼ばれ、一つのブランドとして、とても貴重で高価なものと考えられました。

北海道大学や青森県のリンゴ農家の方々から専門技術や栽培方法の工夫などの力を借りながら品種改良を重ねた結果、「平岸リンゴ」は全国的に有名になりました。しかし、昭和30年(1955年)代から、相次ぐリンゴの病気や札幌オリンピックの開催決定を受けて急速に進んだ宅地化の影響から、リンゴ園は次第に姿を消していきました。今でも区には石造りのリンゴ倉庫がいくつか残っており、当時の様子を現在に伝えています。

平岸リンゴって  
ブランド品  
だったんだ!



## 200年の歴史「天神藤」



天神藤は、樹齢200年をこえた北海道で一番古い藤です。開拓時代に本州から来た人々が盆栽として北海道に持ってきたものをこの土地に植えかえたことがはじまりと言われています。昭和44年(1969年)に、当時の札幌市長・原田與作よしかず氏によって「天神藤」と名付けられました。

個人の方が丹精をこめて育ててきた天神藤は、天神山緑地の一部として、現在新しく整備されています。(整備に関するお問合せ:札幌市建設局みどりの推進課 ☎011-211-2525)

## 暮らしを支えた「用水路」



ぼくたちの暮らしを支えたんだね!

開拓当初の人々は飲み水の確保で大変困ったため、明治6年(1873年)に、精進川から水を引いて、平岸街道まで続く用水路を完成させました。用水路の水は、リンゴ栽培や水田など農業で使われたり、人々の生活に必要な水として使われました。どんどん広げられた結果、上白石の米里地区まで達する約30キロメートルも続くものになりましたが、昭和36年(1961年)に埋め立てられて役目を終えました。

現在は、その一部が天神山緑地内を通る遊歩道になっています。



むかし

明治44年(1911年)頃の平岸街道



いま

現在の天神山緑地内の遊歩道